

◆出演者プロフィール

【講師】

小菅 次男 (こすげ つぎお) 氏



1936年(昭和11年)茨城県水戸市生まれ。35歳のとき、涸沼において廣瀬誠氏とともにヒヌマイトトンボを発見する。長年、地域の動植物の保護や環境教育に取り組み、観察会などを通じて、自然の面白さや自然保護の大切さを多くの人に広める活動をしてきた。

現在は茨城生物の会会長、環境省希少野生生物保護推進委員、茨城県自然環境保全審議会会長などを務める。

【パネリスト】

荒川 明 (あらかわ あきら) 氏

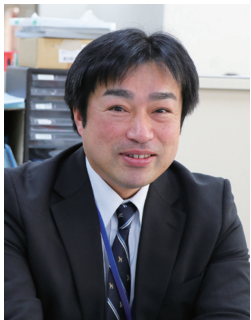


1959年(昭和34年)栃木県栃木市生まれ。昭和52年に大平町役場へ入庁、栃木市との合併により栃木市職員となる。税務、農林、教育委員会を経て総合政策課主幹となり、平成27年4月から遊水地課長を務める。

現在は渡良瀬遊水地保全・利活用協議会部会長として、渡良瀬遊水地のワイズユースに向けた取り組みの中心的な役割を担っている。

【パネリスト】

田口 眞一 (たぐち しんいち) 氏



1971年(昭和46年)茨城県東茨城郡茨城町生まれ。大学卒業後、茨城町役場に入庁。みどり環境課在職時に涸沼のラムサール条約登録事務を担当。平成28年度から現職となり、登録後の涸沼を中心とした地域振興業務とラムサール条約登録湿地ひぬまの会事務局を担当している。趣味は、釣りと読書。ラムサール条約に関わるようになってから、野鳥観察にも興味を持ち、涸沼に出かけている。

【パネリスト】

小栗 幸雄 (おぐり さちお) 氏



1961年(昭和36年)群馬県中之条町生まれ。建設省(現国土交通省)土木研究所を経て、関東地方整備局の河川事務所(利根川下流、霞ヶ浦、下館など)に勤務。この間筑西市土木部に出向(平成25年度~27年度)し、平成28年度より現職となる。

応用生態工学会、(公財)日本生態系協会、日本ビオトープ管理士会、(財)日本自然保護協会、(一社)霞ヶ浦市民協会、NPO法人塚塚の自然と歴史の会などに所属している。

【パネリスト】

芝原 達也 (しばはら たつや) 氏



1968年(昭和43年)東京生まれ。平成12年に(公財)日本野鳥の会より谷津干潟自然観察センター担当レンジャーとして赴任。以来、16年間同センターに勤務する。現在、同センター指定管理者の谷津干潟ワイズユース・パートナーズ/NPO法人生態教育センター所属。昨年から東京湾再生官民連携フォーラムの東京湾の窓PT長を務める。

ラムサール登録地訪問歴36カ所(外国含)。座右の銘:温故知新

【コーディネーター】

山根 爽一 (やまね そういち) 氏



1946年(昭和21年)北海道札幌市生まれ。茨城大学名誉教授。昆虫社会学に関心を持ち、熱帯で進化したとされるアシナガバチやスズメバチなど狩蜂の社会を国内外において30数年にわたり調査・研究してきた。日本昆虫学会会長も務めた。

現在は茨城の生物多様性戦略を推進する拠点として平成27年4月に設立された茨城県生物多様性センターの初代センター長を務める。

◆今回取り組みをご紹介いただくラムサール条約登録湿地

渡良瀬遊水地 …………… 2012年(平成24年)登録

渡良瀬遊水地は、栃木・群馬・埼玉・茨城の4県の県境にまたがる日本最大級の遊水地です。遊水地に渡良瀬川、思川、巴波川の3河川が流入し、約4km下流で利根川に合流しています。周囲を約30kmの堤防に囲まれ、その面積は約3300haにもなります。多くの動植物にも恵まれ、特に野鳥は日本で見られる約半分が確認されています。それらの環境を守るためヨシ焼きなど湿地環境の保全が地域ぐるみで行われています。



国土交通省利根川上流河川事務所提供
渡良瀬遊水地全景



ヨシ焼きの様子

谷津干潟 …………… 1993年(平成5年)登録

谷津干潟は、千葉県習志野市に位置し、東京湾の最奥部に残された約40haの干潟です。周囲の干潟の埋め立てにより長方形に取り残された干潟が市民による保護運動により国際的に重要な湿地として残されることとなりました。干潟にはゴカイやカニなど多くの生き物が生息し、特にシギやチドリなどの水鳥にとって渡りの中継地として重要な場所となっています。現在も多くの地域住民などと協力し保全の取り組みを進めています。



京葉測量(株)提供
谷津干潟全景



谷津干潟の風景